

美術館のある風景 (第15回)

「カフェ1894」をつくる

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二



「カフェ1894」レセプションの様子

三菱一号館美術館には、「カフェ1894」という名のミュージアムカフェがあります。三菱一号館が誕生した1894年にちなむ命名です。

最近では、展覧会後のカフェでのひと時を楽しむ方も多いのではないのでしょうか。居心地の良いカフェやレストラン、そして美しい庭園を備えた美術館は増えていますね。三菱一号館（1894年竣工、1968年解体、2009年復元）を美術館とする計画でもカフェは重要なテーマでした。クィーンアン様式の赤煉瓦建築と似合うカフェを考えた時、場所は二層吹き抜けの旧銀行営業室にすんなり決まりました。明治の近代化の空気を今に伝えてくれる空間であると、皆の意見が一致したからです。

ここで、少し欲深くなりました。折角、歴史的なランドマークに生まれるカフェですから、街角のカフェにもしたいものです。ヨーロッパの諸都市では都市の成熟と共に様々なカフェが誕生し、カフェは都市文化に欠かせない存在となりました。有名なヴェニスのカフェ・フローリアン、ウィーンのカフェ・クラマー、ローマのカフェ・グレコは18世紀に遡ります。そして、19世紀から20世紀に、芸術家やジャーナリスト等の文化人と市民の集まる多くのカフェが都市に花開き、そこから様々な物語が生まれました。パリのサンジェルマン・デ・プレ界隈のカフェ・ド・フロール、ベルリンのロマーニッシュェス・カフェ、ウィーンのカフェ・グリーンシュタイドル、ブタペストのカフェ・ニューヨーク等です。日本でも、大正か

ら昭和のモボ・モガの時代、銀座に多くのカフェが生まれ、女給1,800人を数えたとも伝えられます。

脱線しそうなので丸の内に話を戻します。兎も角、人々の舞台となる街に、カフェ、レストラン、パブ等、人々が集う活気ある風景が生まれて欲しいものです。ヨーロッパの街には屋外にも席を並べるオープンな雰囲気のカフェが街の魅力を演出しています。三菱一号館の「カフェ1894」は街路に起立する赤煉瓦の壁の内側になるので視認性は低く、外からカフェの雰囲気が感じ難いという懸念がありました。しかし、開店後5年目を迎える現在、美術館の定着とカフェづくりに係わる人々の努力や工夫で、昼夜賑わう「カフェ1894」に成長しました。美術展に、待ち合わせに、アフター5の交流に、時には、文化催事や国際交流、雑誌の撮影場所にも活用されています。オープンな雰囲気という課題ですが、灯台下暗し、美術館の緑豊かな中庭に面して3つのカフェが店出し、三菱一号館と庭園を眺めながら寛げるオープンカフェを設えています。カフェ1894で全てを充足するのではなく、美術館と連携して魅力的なカフェゾーンを形成しています。これも街に広がる美術館づくりの一つと言えましょう。また、丸の内仲通りにも多くのカフェが生まれて人々の憩いと交流の場として定着してきました。こうしたカフェが丸の内の都市文化の醸成に繋がることを期待しています。